

条件形式による注釈節について — 実例調査をもとに —

亀田千里

キーワード：注釈節、条件形式、聞き手の理解への配慮、一般性、裏の意味

0. はじめに

日本語の従属節の中には、自分の発話や発話行動に関してなんらかのコメントを言い表しているものがある。

(1) はっきり言って、あいつは頭が悪い。

(2) 本当のことを言えば、あんな仕事はしたくない。

これらは一般的に「注釈」「前置き」などと呼ばれる表現であり(杉戸(1983)、才田他(1984)など。以下「注釈節」と呼ぶ)、節の末尾が「て」「ば」「が」など様々な形式で表される。

注釈節に関しては、モダリティ研究の立場から扱った研究(中右(1994)など)や従属節の用法の一つとして扱う研究(前田(1991)など)があるが、その性格はまだ十分に記述されていない。そこで本稿では、注釈節の研究の一環として、条件形式としてまとめて論じられることの多い「ば」「たら」「なら」「と」¹⁾の4形式で表される注釈節(以下、「条件注釈節」と呼ぶ)について、新聞や小説などにおける使用の実態を観察し、形式ごとに使用頻度の顕著な差が見られること、そしてその差が生じる理由について論ずる。

1. 「注釈節」とは

本稿で扱う注釈節とは、三上(1953,1955,1959)が「発言のムウド」、中右(1994)が「発話行為のモダリティ」と呼ぶ従属節の一種で、発話を表す動詞(「言う」など)を含み、従属節全体が主節に対する話し手の発話態度(モダリティ)を表しているものである。

例えば、以下の(3)(4)を見られたい。

(3) 本当のことを言えば花子はきっと私のことを許してくれる。

(4) 本当のことを言えば花子は太郎の実の娘ではない。

(3)の従属節は、主節で表された事柄が成立するために必要な条件を表している。つまり、「花子が私のことを許す」という事態は、「(私が) 本当のことを言う」という、従属節で表された事態が成立しなければ成り立たない事態である。従って、(3)からはしばしば(5)のような誘導推論が行われることもある。

(5)本当のことを言わなければ花子は私のことを許してくれない。

それに対し(4)の従属節と主節との間には、(3)の従属節と主節の間に見られたような関係は存在しない。つまり、「花子は太郎の実の娘ではない」という事態は、「本当のことを言う」という事態の成立とは関係なく、成立しているのである。このことは、(6)が非文になることから窺える。

(6)*本当のことを言わなければ花子は太郎の実の娘ではない。

更に、(3)と(4)の従属節の違いとして、従属節と主節が(4)のような関係にある場合、その従属節は常に一人称であり、かつ現在時を表している、という点が挙げられる。以下の例を見られたい。

(7) {君／太郎} が本当のことを言えば花子はきっと私のことを許してくれる。

(8)* {君／太郎} が本当のことを言えば花子は太郎の実の娘ではない。

(9) [本当のことを言えば花子はきっと私のことを許してくれ] タ。

(10)本当のことを言えば [花子は太郎の実の娘ではなかつ] タ。

(3)の従属節の一人称を(7)のように二人称や三人称に置き換えることはできるが、(8)を見ると明らかなように、(4)の従属節にはそのような操作はできない。

また、(3)(4)の主節末を(9)(10)のように過去形にすると、(9)の従属節で表されている事態は主節と共に過去の事柄を表すようになるが、(10)の場合は(4)と変わらず現在の事柄を表す。つまり、(9)は「過去に、“本当のことを言う”という事態が成立していれば、その時点において“花子が私のことを許してくれる”という事態も成立した」という意味になるが、(10)の「本当のことを言う」は(4)と同様に、現在時における話し手の発話行為を表明しているのである。

このように、常に一人称で現在時を表す、ということは、(4)の従属節が主節に対するモダリティとなっているということの意味する。このような性格を持つ従属節のことを、本稿では「注釈節」と呼ぶ。

2. 調査の概要

今回調査した資料は、新聞（社説2年分、天声人語3年分）、小説（14冊）、エッセイ（8冊）、対談集（5冊）、シナリオ（25本）、会話データ（インタビュー40本）である。詳細は本稿末を参照されたい。

分析の対象は、それぞれの資料で用いられている「～いえば」「～いったら」「～いうなら」「～いうと」という形式の条件注釈節（以下それぞれ「ば」注釈、「たら」注釈、「なら」注釈、「と」注釈）である³³。「いう」の表記の違い（「言う」「云う」「いう」など）に関しては、区別しない。また「申す」「申し上げる」「います」等、「いう」の敬体も対象に含めている。

なお以下の表現は、完全なモダリティ要素ではなく、命題の一部を構成しているとも考えられるため、本稿では考察対象から外すことにする³⁴。

- ・「～と（いえば／いったら／いうなら／いうと）」
- ・「～に関して／～について／～に限って（いえば／いったら／いうなら）」
- ・「～で（～いえば／いったら／いうなら／いうと）」

3. 調査結果- 各形式の頻度について-

全資料中における「ば」「たら」「なら」「と」注釈の頻度は、以下の通りである³⁵。

	新聞	小説(地の知)	小説(会話)	エッセイ	対談集	シナリオ	会話	計
ば	130	42	21	11	52	2	4	262
たら	3	0	0	0	2	0	0	5
なら	2	5	2	3	0	2	0	14
と	4	17	13	9	29	15	1	88
計	139	64	36	23	83	19	5	369

この表から明らかなのは、各形式によって、使用頻度に差が見られるということである。「ば」注釈は圧倒的に多く、262例（全体の71%）、続いて「と」注釈が88例（24%）用いられている。それに対して「なら」注釈は14例（4%）、「たら」注釈は5例（1%）と、非常に使用頻度が低い。

宮島(1964)には「前おき」には、バ、トはさかんに使われるが、タラはあまり出てこない」という指摘がある。また伊藤(1984)も、「ば」には「前おき」の用法が比較的多く見られるが「たら」にはあまり現れない」と指摘している。更に、接続助詞の用法をまとめた国立国語研究所(1951)を見ると、「ば」「と」の項には「前おき」の用法が挙げられているが、「たら」「なら」にはそれがない。

これらの先行研究で述べられている「前おき」の用法とは、本稿の「注釈節」にあたるものである。つまり、今回の調査結果は、これら先行研究における指摘を裏付けるものであるといえる。

では、同じ「条件形式」として扱われる表現であるにも関わらず、注釈節としての「ば」「たら」「なら」「と」にこのような使用傾向の違いが見られるのは、なぜだろうか。先行研究では管見の及ぶ限り、その理由に関する指摘は見あたらない。以下では「注釈節」の持つ機能と、これら4形式が本来持っている性格との関わりから、この使用傾向の違いの説明を試みる。

4. 条件注釈節の形式による使用傾向の違いについて

4.1 注釈節の機能

4.1.1 2種類の注釈節

従属節の形をとるものに限らず、広く注釈表現を扱った先行研究として、杉戸(1983,1989)、杉戸・塚田(1991,1993)、才田他(1984)、西條(1996)などがある。これらの指摘によれば、注釈の一番基本的な機能は、「聞き手へのなんらかの配慮を示すこと」である。そしてその「配慮」の種類によって、注釈は更に次の2種類に分けられる。

a) 表現の内容とその伝達の過程の調整に配慮したもの。すなわち、「わかりやすさ」や「規範性」に関わるもの。

b) 人間関係の調整に配慮したもの。すなわち「丁寧さ」や「あらたまり」に関わるもの

a)は、話し手の発話が聞き手により理解されやすいよう、発話の表現形式や発話の内容、談話の進め方などに関して、あらかじめ明言するものである。例えば杉戸(1989)では、次のような例が挙げられている。

(11)サキホドカラ説明シテオリマス通り…

(12) アノヨウニ申上ゲルヨリハ、コウ申シ上ゲタ方ガヨロシカッタカモシレマセン。

それに対し b) は、本来なら言うべきではないこと、言ったら聞き手が不快に感じると思われることをあえて述べる時、自分の発言が相手にとって失礼であるということをあらかじめ表明することで、相手にいわば「心の準備」をしてもらい、かつ自分自身その非礼さをわきまえているのだ、ということを表すものである。

(13) ハッキリ言ワセテモラッテ失礼カモシレナイケレド… (杉戸(1989)より)

(14) 「アナタ」ト呼ブノハ気ガヒケマスノデ「先生」ト呼バセテイタダキマス。(同上)

本稿で扱っている「注釈節」は、上記の先行研究で扱われている注釈表現の 1 種であることから、注釈節にもやはり、主として「聞き手の理解への配慮」を表すものと、主として「人間関係への配慮」を表すものがあると考えられる。以下の(15)(16)を見られたい。

(15) 具体的に言うと、彼の身長は 169.3cm だ。

(16) 本当のことを言うが、君の余命はあと 3 年だ。

(15) の下線部は、次にどういう内容の発話をするか、ということをおあらかじめ宣言している。つまり、聞き手の理解がスムーズに行われるための配慮として発話されたものだと考えられる。それに対し(16)の下線部は、「君の余命はあと 3 年だ」という、決して聞き手にとっては喜ばしくない内容の発話を言うにあたり、聞き手に前もってそれを受け入れるための「心の準備」をしてもらうために、あらかじめ宣言を行っている。つまり、人間関係への配慮として発話されたものだと言える。

4.1.2 条件注釈節の機能

本稿では、条件注釈節は主として「聞き手の理解への配慮」を表すものであり、「人間関係への配慮」を表すという性格は非常に弱いと考える。その理由としては、まず条件注釈節が聞き手への働きかけの強い命令文と共に用いることができない、ということが挙げられる³⁾。以下の例文を見られたい。

(17) *はっきり {言えば/言ったら/言うなら/言うと}、お前なんか出て行け。

(18) はっきり言うが、お前なんか出て行け。

命令文というのは、聞き手の意思に関わらず、話し手が聞き手になんらかの行動を強要するものである。このように相手に負担を強いるような発話と共に注釈節を用いる場合、それを「が」による注釈節で表すことは可能だが、(17)のように条件注釈節で表すと、不

自然な文になってしまう。

また、「つまり」「すなわち」「いわば」のように、これまでの発話を総括したり言い替えたりする際に用いられる接続詞を注釈節で置き換えてみると、「て」や「が」による注釈節で置き換えると不自然になるが、条件注釈節で置き換えることは可能である。

(19)彼は社長に、明日から会社に来なくてもよいと言われた。つまり解雇されたのだ。

(20)～。簡単に言えば解雇されたのだ。

(21)～。簡単に言って／*簡単に言うが 解雇されたのだ。

接続詞というのは話し手が文と文、段落と段落などをつなぐ際に用いるもの“だが、聞き手の側からすれば、相手の用いる接続詞を手がかりにして話し手の発話の流れを予測し、よりスムーズに話を理解することができる。つまり接続詞は、「聞き手の理解への配慮」に関わる要素であるといえる。条件注釈節がこのような接続詞との置換が可能だということとは、条件注釈節も「聞き手の理解への配慮」を表しているということを意味していよう。

以上のことから、条件注釈節は「人間関係への配慮」よりも主として「聞き手の理解への配慮」を表すものであると考えられる。

4.2 「ば」「と」が用いられる理由

4.1.2 で見た条件注釈節の性格を踏まえて、以下では、「ば」と「と」が注釈節として用いられることが多いのに対し同じ条件形式である「たら」「なら」があまり用いられていない理由について、これらの形式が本来持っている性格との関わりから考える¹⁹⁾。本節では、まず「ば」「と」が注釈節として用いられる理由について考察する。

益岡 (1993a)は「ば」の性格を、次のように記述している。

バ：前件と後件の組み合わせによって時間を超えて成り立つ一般的な因果関係を表す。事態の一般的依存関係に対する認識を表す。

つまり、「ば」は「前件の事態が生じた時は必ず後件の事態が起こる」という一般的な因果関係を表している条件形式であるといえる。従って、小出他(1981)や伊藤(1984)も言及しているように、前件と後件との結びつきに話し手の主観が関わるか否かという点から言えば、「ば」による結びつきには話し手の主観が入らず、客観性が強い表現であると言えよう。

この、「ば」の持つ「一般性」「客観性」という性格は、条件形式による注釈がもつ「聞き手の理解への配慮」という性格と非常に強く結びつくと考えられる。すなわち、聞き手

の理解を助けるためにこれから述べる発話についての何らかの情報をあらかじめ述べる、という行為は、いってみれば、話し手が主節の発話の場とは切り離された「注釈の場」をいったん設定し、その「場」の中で発話を行おうとするものである。そして、その注釈に一般性、客観性を持たせるために、話し手の主観が入らずより一般的、客観的な表現である「ば」が選択される可能性が高くなるのだと考えられる。

では、「と」に関してはどうか。益岡(1993a)によれば、「と」は次のような性格を持つ。

ト：前件と後件で表される2つの事態の一体性を表す。広義の順接並列の表現。

中心的用法は、非現実の事態ではなく現実に観察された事態を表現するもの。従って、この形式の表現は、条件表現とは部分的に関わるにすぎない。

「と」は、厳密には条件表現ではなく、実際に起こった事態について述べる時間の表現であると言われている(益岡(1993a)、坪本(1993)、鈴木(1994)など)。従って、前件と後件との結びつきが強い。これは「と」が「ば」と同様、(22)のように一般的な条件を表すのに用いられることからもうかがえる。

(22)春になると桜が咲く。

「と」が注釈節として用いられるのは、このためであると考えられる。つまり、「と」も「ば」と同様に、一般的、客観的な性格を持つがゆえに、聞き手への理解への配慮を表す注釈節として用いられるのであろう。

4.3 「たら」「なら」が用いられにくい理由

益岡(1993a)は、「たら」「なら」の性格を次のように述べている。

タラ：個別的事態間の依存関係を表す。前件で時空間の中に実現する個別的な事態を表し、後件でその事態に依存して成立する別の個別的事態を導入する。

ナラ：前件である事態が真であることを仮定し、それに基づいて後件で表現者の判断・態度を表明する。

すなわち、「たら」は、まず現実になんらかの個別的事態が実現した、ということ話し手が想定し、それに伴って別のどのような事態が実現するかを表現しようとするものである。また「なら」は、なんらかの事態を(実際どうであるかはともかく)「真である」と話し手が仮定した上で、それに関する話し手自身の判断や態度を言い表そうとするものであり、前件と後件の条件付けには、話し手の判断が関わっている。つまり「論理性」「客

観性」という点から言えば、「たら」「なら」は「ば」に比べて論理性、客観性が低い表現であると言える²⁴。

「たら」「なら」が注釈節としてあまり用いられていないのは、この理由によるものだと考えられよう。つまり、「ば」「と」に比べて話し手の主観が強い表現であるため、あくまで客観的な、談話を構成するために用いられる注釈節の性格とはなじみにくいのだと思われる²⁵。

5 「ば」注釈と「と」注釈の比較

今回の調査では、「ば」注釈が262例、「と」注釈が88例見られた。これらの数値は「たら」注釈(5例)、「なら」注釈(14例)と比べると圧倒的に多い。

では、「ば」注釈と「と」注釈には、果たして何らかの違いがあるのだろうか。本節では、資料の性格の違いと、仮定性の有無について言及したい。

5.1 資料の性格の違い

以下の表は、各資料における「ば」注釈と「と」注釈の使用頻度とその割合をまとめたものである。表の上段の数値は各注釈節の実数を表し、下段のカッコ内の数値は各注釈節がそれぞれの資料で用いられた総条件注釈節数に占める割合を表す。

	新聞	小説(題)	小説(挿話)	エッセイ	対談集	汁リオ	会話
「ば」注釈	130 (94%)	42 (66%)	21 (58%)	11 (48%)	52 (63%)	2 (11%)	4 (80%)
「と」注釈	4 (3%)	17 (27%)	13 (36%)	9 (39%)	29 (35%)	15 (79%)	1 (20%)
総条件注釈節数	139	64	36	23	83	19	5

この表を見ると、資料の種類によって「ば」注釈と「と」注釈の出現率が異なっていることが分かる。まず新聞では全条件注釈節139例中のほとんどが「ば」注釈(130例,94%)であり、「と」注釈はわずか4例(3%)だけである。ところが小説の地の文では全64例中、「ば」注釈が42例(66%)、「と」注釈が17例(27%)と、新聞に比べ「と」注釈の割合

が高い。更に小説の会話文では全 36 例中「ば」注釈が 21 例 (58%)、「と」注釈が 13 例 (36%)、エッセイでは全 23 例中「ば」注釈が 11 例 (48%)、「と」注釈が 9 例 (39%)と、いずれも「と」注釈の割合がより高くなっている。対談集でも同様に、全 83 例中「ば」注釈が 52 例 (63%)、「と」注釈が 29 例 (35%)で、新聞よりもはるかに多く「と」注釈が用いられていることがわかる。更にシナリオにおいては、全用例は少ない (19 例)ものの、その大半は「と」注釈 (15 例,79%)である。

山口(1969)には、「『ば』は、口頭語よりも文章語において広く用いられている」という指摘がある。また小出他(1981)も、「ば」は「たら」「と」など他の形式と比較して、あらたまった文体で用いられることが多いと指摘する。これらの指摘と、今回の調査結果とを照合してみると、新聞の論説のような改まった文体においては、「と」注釈よりも「ば」注釈の方がよく用いられ、エッセイや対談集、さらにはシナリオと、改まり度が低くなるにつれて「と」注釈も用いられるようになるのだと考えられる。

なお今回扱った会話資料に「と」注釈があまり現れていないのは、この会話が初対面の者同士によるインタビューであり、会話とはいえども改まり度が高いためであると思われる。

5.2 「裏の意味」の有無

「ば」注釈と「と」注釈の違いとしてもう 1 つ考えられるのは、「裏の意味」の有無である。

益岡(1993a)や小出他(1981)が指摘するように、「ば」はその条件を表すという性格から、しばしば「裏の意味」が強く感じられる。それに対し「と」は時間的な継起性が強く、「裏の意味」は感じられない。これは以下の例文から確認できる。

(23)金を出せば秘密は守ってやる。

(24)*金を出すと秘密は守ってやる。(以上、小出他(1981)より)

(23)は相手に対する脅迫を行っている発話であり、「相手が「金を出す」かどうかかわからないが、「出す」場合には秘密を守り、「出さない」場合に暴露する、というように裏の意味を響かせることによって脅迫を成立させている」(小出他(1981):p.34)。(24)が非文になるということは、「と」に「ば」のような「裏の意味」が感じられないということの意味していよう。つまり「裏の意味」(金を出さない場合にどうするか、ということ)が表されていないために、脅迫として成り立っていないのである。

「ば」注釈や「と」注釈も、「ば」や「と」が本来持っているこのような性格を受け継いでいると考えられる。「ば」注釈が用いられている例の中には、次のようにある物事をいろいろな側面から言い表しているものがある。

(25) 町に表通りと裏通りとがあるように、文化にも表と裏がある。表は、良く言えば“流行り” 悪く言えば“通俗”という言葉で表現される。テレビドラマ、人気タレント、おしゃれな店、等々……これに対して裏の文化は、かっこ良く言えばサブカルチャーというやつである。悪く言えば“根暗”や“おたく”的なものことだ。(『愛こそがすべて』/p.242)

このように言い方や観点を列挙する場合には「と」注釈よりも「ば」注釈の方が適しているように感じられる。すなわち、「いい表現と悪い表現」のように、相対立するものを列挙する場合は、「裏の意味」を示すことができる「ば」注釈の方が選ばれやすいであろう。

逆に、「ば」注釈より「と」注釈の方が用いられやすい場合もある。

(26) (お菓子を食べている三人。残りはあとひとつ。)

A子：B子ちゃん、食べたか？

B子：えっ、いいよ。A子ちゃん食べなよ。

A子：いいよ、B子ちゃん、どうぞ。

(しばらくやりとりした後で)

B子：じゃあ、私食べるね。本当のこと[]、すごく食べたかったの。

(26)の下線部の[]には「いえば」より「いうと」の方が入りやすい。これは「すごく食べたかったの」という言葉がB子の素直な気持ちを表現したものであるからだと考えられる。もしこれを「本当のこといえば」とすると、そこには「今までいわなかったけれども、本当のことを言うとならば」というようなニュアンス(裏の意味)が含まれてしまうため、(26)のような文脈においてはあまり用いられないと思われる。

6. おわりに一まとめと残された問題一

本稿では、条件形式による注釈節について、実例調査の結果をもとに考察した。新聞や小説などにおける使用状況を調べた結果、「ば」注釈、「と」注釈が多く用いられているのに対し「たら」注釈と「なら」注釈はあまり見られない、という違いが確認された。そ

してこの違いに対して、本稿では「ば」「と」が本来持っている「一般性」という性格から、説明を試みた。また「ば」注釈と「と」注釈の違いに関しては、資料の性格の違い、及び「裏の意味」の有無に言及した。

今回扱うことのできなかった問題として、まず、「て」や「が」で表される注釈節との比較が挙げられる。条件注釈節の性格を更に詳しく記述するためにも、他の形式との比較は必須であろう。また、今回考察対象から外した「～といえば」のような形式や、更には「言ってしまうば」「言わせると」など慣用的とも思われる形式との関わりについても今後明らかにする必要があると思われる。

【注】

- 1) 後に見るように、厳密には「と」は条件形式ではない。しかし条件の用法を持つということから「ば」などと共に論じられることが多いため、本稿でも「と」を考察対象に含めることにする。
- 2) 実際の資料には「～いうならば」という形式が2例見られたが、これらは「～いうなら」に含めて分類した。
- 3) それぞれの例文を以下に示す。
 - (a) 白川博士と言えばいまや大学一の有名人だ。
 - (b) ピアノの腕に関して言うなら彼の右に出る者はいない。
 - (c) うちのネコは、人間で言うと35歳だ。
- 4) 小説に関しては、結果を地の文と会話文とに分けて示す。
- 5) 実例を見ても、今回調査した条件形式による注釈節で、命令文と共に用いられているものは1例も観察されなかった。

なお、亀田(1997)では、開き手への働きかけの有無という観点から「ば」注釈と「が」注釈の比較を行っている。
- 6) 井手(1980)は『国語学大辞典』の「接続詞」の項において、接続詞を次のように記述している。

「単独で一文節をなし、二つ以上の語・句(文節・連文節)・文・段落(文章)、またはそれ相当の形式によって表現された叙述内容相互間を関係づけ、結び合わせる職能をもつ。すなわち、接続詞は、かならず先行の叙述内容(前件)を承けて、後行の叙述内容(後件)を先触れしつつ誘導する語詞で、前件と後件との関係の認定は、話し手の立場においてなされる。」
- 7) 条件節の意味記述に関しては様々な研究があるが、本稿では益岡(1993a)に依拠することにする。
- 8) 小出他(1981)や伊藤(1984)にも、同様の記述が見られる。
- 9) なお「たら」に関して言えば、「たら」という形式がすでに完了/過去の「た」を含んでおり、それが「現在時を表す」というモダリティ本来の性質から外れる、という点も、注釈節にあまり用いられない理由の1つとして考えられるかもしれない。

【資料】

<新聞>

朝日新聞 1985、1986 年社説／朝日新聞 天声人語 1985-1987 年

<小説>

清水義範『国語入試問題必勝法』（講談社文庫）講談社、1987 年／村上春樹『風の歌を聴け』（講談社文庫）講談社、1979 年／村上春樹『カンガルー日和』（講談社文庫）講談社、1983 年／村上春樹『パン屋再襲撃』（文春文庫）1989 年／横田順彌『悲しきカンガルー』新潮文庫、1986 年

以下は、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』所収

阿川弘之『山本五十六』1965 年／安部公房『砂の女』1962 年／赤川次郎『女社長に乾杯！』1982 年／井上ひさし『ブンとフン』1970 年／椎名誠『新橋烏森口青春篇』1987 年／筒井康隆『エディプスの恋人』／星新一『人民は弱し官吏は強し』1967 年／松本清張『点と線』1957-8 年／村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1985 年

<エッセイ>

芥川也守志『音楽を愛する人に』旺文社文庫、1981 年／五木寛之『風に吹かれて』新潮文庫、1968 年（『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』所収）／糸井重里・村上春樹『夢で会いましょう』講談社文庫、1986 年／大槻ケンヂ『解説』柴門ふみ『愛こそがすべて』（角川文庫）海竜社、1990 年／さくらももこ『ももこのいきもの図鑑』集英社文庫、1998 年／中村誠一『サクソ吹きに語らせろ！』新潮文庫、1986 年／林真理子『ウエディング日記』角川文庫、1991 年／原田宗典『わがモノたち』（新潮文庫）新潮社、1995 年

<対談>

阿久悠・和田誠『A 面 B 面』ちくま文庫、1999 年／阿川佐和子『阿川佐和子のアハハのハ』文春文庫、1999 年／ビートたけし『ザ・知的漫才 結局わかりませんでした』集英社文庫、1999 年／椎名誠『私たちの真剣おもしろ話』実業之日本社、1983 年／椎名誠・沢野ひとし・木村晋介・目黒孝二『発作的座談会 2 いろはかるたの真実』本の雑誌社、1996 年

<テレビドラマシナリオ>

「パパはニュースキャスター」「With Love」「逢いたい時にあなたはこない」「スチュワーデス刑事 1、2」「双子探偵」「魔夏少女」「うちの子に限って」（<http://www.plala.or.jp/ban/script.html>）

<ラジオドラマシナリオ>

「クリスマス・キャロル」「ハプニング」「土砂降りダンス」「魔法のランプ」「15 才からのハガキ」「卒業旅行」「ストレスイレイサー」「龍宮城の贈りもの」「山おたくの恋」「彼の時差・彼女の食卓」「確率の問題」「通り雨」「桜の下で」「七タトライアングル」「寂しいあなた癒します」「えー、お笑いを一席」「Party Boss」「ドギーズワールド」（<http://www.nnr.co.jp/nnr/inf/drama/>）

<会話データ>

福岡工業大学上村研究室 日本語会話データベース (<http://corpus.fit.ac.jp/index.html>) より
インタビュー会話 15-30 分×40 会話

【参考文献】

- 有田節子(1999)「プロトタイプから見た日本語の条件文」『言語研究』115
- 井手 至(1980)「接続詞」国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版
- 伊藤 勲(1984)「「ば」「たら」「なら」の用法」『紀要』第8号 国際学友会日本語学校
- 亀田千里(1997)「いわゆる「注釈」を表す従属節について―「率直に言うが」と「率直に言えば」―」『筑波応用言語学研究』4 筑波大学大学院文芸・言語研究科応用言語学コース
- 小出慶一・小松紀子・才田いずみ(1981)「ト・バ・タラ―談話における選択要因をもとめて―」『アメリカ・カナダ―大学連合日本研究センター紀要4』
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞―用例と実例―』秀英出版
- 西條美紀(1999)「談話におけるメタ言語の役割」風間書房
- 才田いずみ・小松紀子・小出慶一(1984)「表現としての注釈―その機能と位置づけ―」『日本語教育』52号
- 杉戸清樹(1983)「待遇表現としての言語行動―「注釈」という視点―」『日本語学』2-7 明治書院
- 杉戸清樹(1989)「言語行動についてのさまりことば」『日本語学』8-2 明治書院
- 杉戸清樹・塚田実知代(1991)「言語行動を説明する言語表現―専門的文章の場合―」『国立国語研究所報告103』研究報告集12』秀英出版
- 杉戸清樹・塚田実知代(1993)「言語行動を説明する言語表現―公的なあいさつの場合―」『国立国語研究所報告105』研究報告集14』秀英出版
- 鈴木義和(1994)「条件表現各論―バ/ト/タラ/ナラ―」『日本語学』13-9 明治書院
- 坪本篤朗(1993)「条件と時の連続性―時系列と背景化の諸相―」益岡編(1993)所収
- 中石 実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 前田直子(1991)「条件文分類の―考察」『東京外国語大学日本語学科年報13』
- 前田直子(1995)「バ、ト、ナラ、タラ―仮定条件を表す形式―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義語表現の文法(下)』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)「モダリティの文法」くろしお出版
- 益岡隆志(1993a)「日本語の条件表現について」益岡編(1993)所収
- 益岡隆志(1993b)「条件表現と文の概念レベル」益岡編(1993)所収
- 益岡隆志編(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法(改訂版)』くろしお出版
- 三上 章(1953)『現代語法序説―シンタクスの試み―』刀江書院(くろしお出版復刊、1972年)
- 三上 章(1955)『現代語法新説』刀江書院(くろしお出版復刊、1972年)
- 三上 章(1959)『新訂版 現代語法序説』刀江書院(『続・現代語法序説』くろしお出版復刊、1972年)
- 宮島達夫(1964)「バとトとタラ」『講座現代語6 日語文法の問題点』明治書院
- 山口堯二(1969)「現代語の仮定条件法―「ば」「と」「たら」「なら」について―」『月刊文法』2-2 明治書院